様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１２６１１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０２１３

研究課題名（和文）『十訓抄』諸本と享受の研究ー鎌倉期説話集の基礎的研究としてー

研究課題名（英文）The codices and printed books of Jikkinsho and their interpretation

研究代表者
内田　澪子（UCHIDA, Mioko）

お茶の水女子大学・リーダーシップ養成教育研究センター・講師(研究機関研究員)

研究者番号：５０４４２４９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,900,000円、（間接経費）　870,000円

研究成果の概要（和文）：鎌倉時代説話集『十訓抄』の作品研究を深めるための基礎研究として、現存する写本･版本の調査および本文研究、明治期以降に於ける享受の様相について調査・研究を行った。
片仮名・平仮名写本および版本については、可能な限り原本調査を行い、これを一覧する基礎資料を作成するとともに、それぞれの関係について考察を行った。更にその分析の最初として『十訓抄』序文の構造や編者の編纂意識を分析する論考を纏め、成立契機として京都六波羅探題府の設置を注視する口頭発表を行った。

研究成果の概要（英文）：This study examined the extant codices and printed books of Jikkinsho which was originally written in the Kamakura period, and how this literature has been interpreted since the Meiji period. Firstly as the basis of this research, the bibliographic data of codices were listed, secondly the textual collation of manuscript was done, and thirdly the structure of preface and the intent of compiler were analyzed. As the result, it turned out that the literature came into existence in connection with the establishment of Rokuhara-tandai government.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学･日本文学

キーワード：日本中世文学　説話　説話集　『十訓抄』

１．研究開始当初の背景

建長 4（1252）年に成立した『十訓抄』に関する研究は、編者論（永井義憲「十訓抄の作者」1952、乾克己「十訓抄の作者は菅原為長か」1967、浅見和彦「十訓抄編者攷」1997 他）を除くと、専論といえる作品研究は多くない。

一方高等学校古典教材としてしばしば採り上げられることとも相まって、教訓的説話集というこれまでの作品理解は広く浸透している。しかし、日本中世史研究によって、鎌倉期主従関係、特に得宗や探題被官の実態が解明されつつある(森幸夫『六波羅探題府の研究』2005、高橋慎一朗『中世の都市と武士』)1996 他)中で『十訓抄』を捉え直してみると、文学史上の再評価が可能なのではないかと見通している。

その研究の為にも、『十訓抄』諸本調査･研究の他、特に本文の校訂、更に享受に係わる情報の収集といった、極めて基礎的な調査･研究を行う必要がある。

２．研究の目的

(1)　『十訓抄』写本の諸本調査を行う。片仮名写本の新たな伝本の発見に努める。同時に必要に応じて版本の調査を行う。

(2)　片仮名本、片仮名本『十訓抄』の本文校訂を行う。

(3)　享受の様を調査・研究するために、近代の学校教科書所収状況や、『十訓抄』に関わる出版状況について調査を行い、情報を収集・分析する。

３．研究の方法

(1)　『国書総目録』に記された伝本情報基に、現在様々な図書館が公開している蔵書情報などにもより、『十訓抄』の伝本を抽出する。これを可能な限り実見・調査し、各写本の性格や本文の調査を行い、情報を収集する。

(2)　収集した情報をそれぞれに分析すると共に、片仮名本、平仮名本の本文の校訂を行う。

(3)明治期以降の学校教科書や出版物に採録された『十訓抄』を調査し、傾向を分析･研究する。

４．研究成果

(1)　『国書総目録』に記載された『十訓抄』の写本は 35 本程であるが、これに図書館蔵書情報などから得られた情報を加えて、現在 4 本の片仮名写本、44 本の平仮名写本が抽出できた。これらのうち片仮名本の「吉田幸一博士蔵、片仮名、上巻欠」本(泉基博『校本十訓抄』1996 年には引用されている)は現在所在が確認できず、他にも『国書総目録』に記載があり、国文学研究資料館にもマイクロ情報の形で保存されていても、実物が確認できないもの、また実見の適わない資料なども存在したが、現時点で 25 本の調査を行った。版本については、元禄六年、享保六年、寛延四年、文化二年、天保十四年版本が『国書総目録』にあがるが、他に、明和四年、文化五年、明治十六年、明治三十四年を加え、現時点で 111 本を抽出した。

(2)　写本について概観すると、片仮名写本については、現在行方不明の妙覚寺本を含め、新たな伝本を見出すことは適わなかった。一方で平仮名本の欠脱部分を妙覚寺本で補った彰考館本に加え、名古屋大学図書館蔵小林文庫本 152、宮内庁書陵部蔵村雲本などが、「補巻」として同様に片仮名本の佚文を伝えており、片仮名完本と同じ奥書も有することを確認した。

(3)　平仮名写本は、七段と十段後半を欠く有欠本として知られているが、今回の調査でもこれは全て共通した。一部に欠脱のない平仮名写本があるが、例えば東京大学総合図書館南葵文庫本 B40-777 は元禄六年版本の写しである。

但し岡山大学池田文庫本(貴 213-24-1~3)は例外とする。該本は平仮名本ではあるが、欠脱が無く、通常の欠脱部分は片仮名本と説話番号なども重なる。但し片仮名本が説話番号を持たない第一段にも番号が振られていて、この番号は現存のどの版本などとも合致しない。そもそも本文とは別筆で冒頭に元禄五年の書き込みがあるため、本文書写時期は元禄五年以前かと思われるから、最初の版本である元禄六年版本が世に出る前の写本である可能性が高い。

該本が、片仮名本を平仮名で写したものである可能性を含め、更に精査を継続する予定である。

(4) 現在行方不明の妙覚寺本は、彰考館本に「妙覚寺本」、書陵部蔵本に「妙覚寺本、椹斎本如此アリ」と、どちらも片仮名本奥書などに附された傍書によって広く知られているが、今回確認した片仮名本奥書には、妙覚寺云々の記載はない。他方版本であるが、東京大学総合図書館蔵享保六年版本(B40-1384)には「妙覚寺本」を傍書した片仮名本奥書が註記され、更に「以家蔵古鈔本校合畢、享和二年(1802)九月五日、狩谷望之、明治卅一年(1898)十二月二日以関根氏蔵本謄写畢、萩野懐之」の朱書を確認した。書陵部本朱傍書にある、「妙覚寺本」の傍書を持った片仮名本が、狩谷椹斎蔵本であったことが追認できた。当該版本中にはこの朱書と同筆とみられる朱の書き込みが多くあり、これは萩野氏の筆になると思われた。

狩谷椹斎を中心とした人的関係とその間での書籍の貸借や校合状況に関して、新しく見出された情報を加え、検討すべき課題を得た。

(5) 版本は、元禄六年版本と享禄六年版本の二種に大別できる。元禄六年版本の中で、もっとも数の多いのは9冊に整えられたもので、これが当初の形であったと思われる。他に12冊や8冊、3冊になっているものがあるが、それぞれどの段階で世に出されたものであるのか不明である。但しこれらは現時点ではそれぞれ１点ずつ存在するもので、たとえば現状 12 冊のノートルダム清心女子大学黒川文庫本は、当初は９冊であったものに、最低２度の改装がおこなわれた痕跡が認められる。他の冊数の異なる元禄六年版本も、私的な改装を受けた結果である可能性が高い。

享禄六年絵入版本は、当初 12 冊で刊行されたと思しく、この形をそのまま伝えるのは名古屋大学図書館小林文庫 155 である。こちらも他に 10 冊、6 冊、5 冊、3 冊など形態に違いがあるが、元禄六年版本のように私的な改装によるものというよりは、形態を変えて刊行された可能性が低くない。但しいずれも実際の刊期は不明である。

また享禄六年版本以降の版本は、寛延四年、明和四年、文化二年、文化五年、天保十四年、明治十六年、明治三十四年、すべて享禄六年版本の後印本である。その文化二年版本にも 12 冊と 10 冊のものがあるなど、「享禄六年」のままで摺られたものを含め、ひとつの版木で相当数が摺られたことになる。これが通常「流布本」と呼称されることも故無しとしない。

(6) 小浜市立図書館蔵伴信友旧蔵元禄六年版本への書き込みのうち、「古本」あるいは「古」と記されたものは、「妙覚寺本」との校合であるとしている。先述の東大総合図書館 B40-1384 本他もあわせ、版本であっても校合をした書き込みなどがあるものは、片仮名・平仮名写本の流布・利用について知る手がかりを残している。版本の書き込みを含めた調査は今暫くの時間を要し、継続して調査・研究を行う予定である。

この継続調査事項は、片仮名本を基礎とした本文の校訂作業にも、不可欠である。片仮

名本を基礎とした校訂作業に反映させつつ、この提示を急ぐ。

(7)　『十訓抄』作品研究に関わる研究も、並行して行った。説話の管理や利用の視点からする研究として、長谷寺の縁起についてこれを行い、数多く伝わる長谷寺縁起群を分類することによって、説話の担い手や、縁起や説話の言説を再構成する機会などについて、論文にまとめた。

　また『十訓抄』序文を改めて読み直すことから、作品理解を深める論文をまとめ、その他、『十訓抄』成立の場として六波羅探題府周辺を考える有効性について、文化史を視野に入れて検討し口頭報告を行った。

(8)　享受に関わる調査・研究は、当初調査先に東書文庫を計画していたが、初年度地震災害の影響による休館などがあり、まず『十訓抄』に関わる刊行物の調査を先行して行った。明治元年(1868)以降現在までに、再版されたものも含めのべ100点弱程の刊行が確認できた。全体の情報を概観すると 1930 年代が刊行数のピーク(全体の約 20%)であるが、第二次大戦終戦後極端に落ち込んでいる(全体の約 4%)。

　教科書に採録された『十訓抄』説話の調査は、調査先を筑波大学図書館や国立教育政策研究所などに変更して、改めて再開したが、調査対象多数により作業を残した。調査を継続すると共に、刊行物の傾向と併せた検討を継続する。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
1．内田澪子「『十訓抄』序文再読」(『日本文学』No.709・第 61 巻第 7 号・44～54p・2012 年 7 月 10 日・査読無(依頼原稿))

2．内田澪子「『古事談抄』書写時期について」(『國語國文』第 80 巻第 8 号・35～52p・2011 年 8 月 25 日・査読有)

〔学会発表〕（計 1 件）
1．内田澪子「六波羅探題府周辺の〈文字行為〉―『十訓抄』試論―」(ヘルシンキ大学・タリン大学・筑波大学日本研究学術フォーラム, 2012 年 9 月 7 日・於ヘルシンキ大学，日本文学・文化領域：中世研究における越境・交差・相関)

〔図書〕（計 1 件）
1．『中世の寺社縁起と参詣』(共著) 徳田和夫編・竹林舎・2013 年 5 月 25 日，論文 ： 内田澪子「寺社縁起と説話集−長谷寺縁起群考−」・201～231p

〔その他〕
1．コラム：内田澪子「「北叟」と「塞翁」」(『もう一つの古典知』アジア遊学 155・27～33p・2012 年 7 月 31 日)

６．研究組織
(1)研究代表者
内田　澪子（UCHIDA, Mioko）
お茶の水女子大学・リーダーシップ養成教育研究センター・講師（研究機関研究員）
研究者番号：50442497

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし